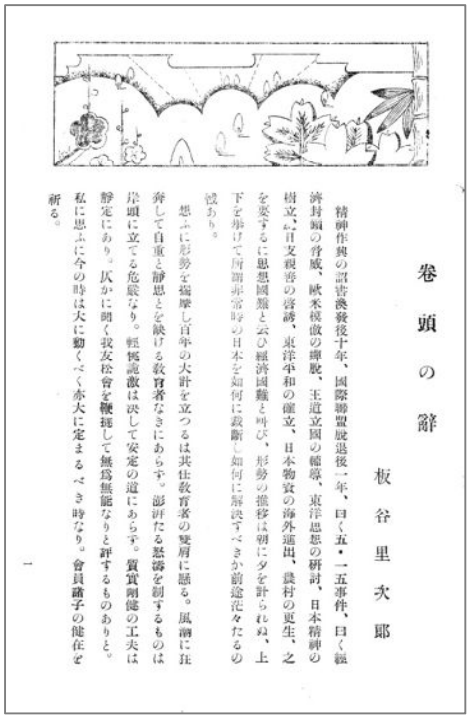
「友松」の変遷

No.5　平成 22 年（2010）８月

昭和８年（1933 年）１２月２５日発行　第１９号
A5 版　総ページ　１０８ページ　縦書き　一段または二段組み

＜ 主な内容 ＞（ 数字はページ数 ）
＊巻頭の辞　挨拶(3)　＊寄稿・国史における鎌倉の地位・日本千字文　日本精神を尋ねて等(22)　＊弔慰(16)　＊卒業生指導者講習会消息(4)　＊教育春秋(10)　＊支部消息(42)　＊会務・会計報告　役員名簿　寄付者芳名　編集後記(7)　＊会則(4)



巻頭の辭

板谷里次郎

精神作興の詔書渙發後十年、國際聯盟脱退後一年、曰く緊縮財政の脅威、欧米模倣の輝脱、王道立國の輝耀、東洋思想の研討、日本精神の樹立、日支親善の喜誘、東洋平和の確立、日本物資の海外進出、農村の更生、之を奚するに思想國難と云ひ經濟國難と叫び、形勢の推移は朝に夕を計られぬ、上下を挙げて所謂非常時の日本を如何に救解し如何に解決すべきか前途茫々たるの感あり。

思ふに形勢を猛察し百年の大計を立つるは其任教育者の双肩に懸る。風潮に狂奔して自重と静思とを缺ける教育者なきにあらず。澎湃たる怒濤を制するものは岸頭に立てる危厳なり。軽挑詭激は決して安定の道にあらず。質實剛健の工夫は静定にあり。仄かに聞く我友松會を鞭撻して無爲無能なりと評するものありと。私に思ふに今の時は大に勤くべく赤大に定まるべき時なり。會員諸子の健在を祈る。

教育春秋

教育國策は國家百年の大計である。非實と規範の融合、教育者自身の結晶の如き、悲しき乱百の思潮の統制、日本精神の高揚の下に、思ふに乱百の思潮の統制、非實と規範の融合、教育者自身の結晶の如き、悲しき乱百の思潮の統制、日本精神の高揚の下に、以て新文化を、教育國日本の建設に努力せねばならぬ。この点に於て、本年も亦この欄に多数會員の寄稿を得たり、其心底深しと共に、今しばらく聞くの生徒式を、平凡たるこの教育春秋に寄せ得て年新たし。機逸、機敏の教育集に於て、新を興にすると雖も、そこに尊い個性とが、特殊な体現にあるも、治むるも人としては何を部下に強むるか、若し人は何を現教育界に希望するか、治むるも人としては何を部下に強むるか、若し人は何を現教育界に希望するか、新旧氣なる若き教師としては現在何れに心魂を打ち込みつゝあるか、これは新旧氣なる若き教師としては現在何れに心魂を打ち込みつゝあるか、これは凡て吾人の研究であり、また現教育界の一様相でもあるであらう。人は蓋に一般の情勢を通観し、特に、大いに反省せられ、尊敬せられる。人は蓋に一般の情勢を通観し、特に、大いに反省せられ、尊敬せられる。無為の資料に有位の位置を、特に、大いに反省せられ、尊敬せられる。無為の資料に有位の位置を、特に、大いに反省せられ、尊敬せられる。特に、大いに反省せられ、尊敬せられる。

師範学校の校長の挨拶に「時恰も国家空前の非常時に直面し、内国民精神の充実と、外国家的躍進とを企画すべき秋であります」ではじまっている。

左の会長「巻頭の辞」にも、「思想国難」「経済国難」等が記されている。また、「百年の大計を立つるは其任教育者の双肩に懸る」と教育の重要性を述べている。

寄稿「国史における鎌倉の地位」は元師範学校校長が書いたもので、

① 幕府濫觴の地としての鎌倉
② ②武士道発祥の地としての鎌倉
③ ③元寇国難打開策源の地としての鎌倉

以上の柱立てで鎌倉の地の重要性を述べ、最後に「友松会の奮起を期待嘱望する」と結んでいる。

母校があった鎌倉の地位を知る意味で貴重な論述です。機会があった一読することをお勧めします。

シリーズ４の「友松８号」でも紹介しましたが、「教育春秋」を長年続けて掲載しています。１９号でも１０ページにわたって、退職者の在職年数・近況、校長在職者の教育信条・感想、最近卒業者の努力目標等々を寄稿順掲載している。

われわれの大先輩が、何を考え、何をしていたが解るので、これも読んで見たら良いと思う。（もしかすると祖父や親の文があるかも知れませんよ）